



馬耳東風

晩酌と言えば以前は日本酒であったが、ここ十数年はワインのことが多い。ワインはご承知のように値段の幅が極めて大きい。日本酒に比べて総じて値段と味が比例しており、高いものほど味も良いようであるが、一部の輸入品の中には低価格の割においしいものが多いので愛飲している。過日珍しく国産のワインを求め、ラベルを見て「オヤ？」と思った。いつも飲んでる輸入ワインは容量が750mlと表記されているのに720mlとなっていたのである。調べてみると、わが国では尺貫法の名残で日本酒だけでなくワインも4合に相当する720ml瓶を使用しているそうで、ウイスキーも720mlボトルが多いという。日本酒では近年紙パックも多いが、容量は1.8lと0.9lとなっていて720mlパックというのはいないようだ。歴史の浅いパックは従来の慣習に捉われる必要はなかったからだろうが、牛乳やジュースなどのように1lとか0.5lとせず、1.8lと0.9lとしたのは、やはり従来の日本酒の単位の合、升を意識したためだろうか、興味深い。

このメートル法は、フランス起源だという。ヨーロッパでは国が違えばもちろんのこと、同じ国内でも地域によって度量衡体系が少しずつ異なっていて、税金の算定、軍需物質の調達や要塞の建設のために煩雑な換算をしなければならず、役人だけでなく商人や職人たちも不便を感じていた。しかし度量衡の改革は、社会体制の改革をも伴うので手がつけれないでいたという。そんな中フランス革命が起き、新たな選挙によって選ばれた国民議会は、利権やしがらみを排するため、フランス科学アカデミーに全国共通の度量衡を制定する権限を与えて出来上がったのがメートル法だという。この新しい単位系では、長さの単位であるメートルは子午線の四千万分

の一として、面積は長さの積、体積は面積と高さの積、重さの単位であるキログラムは最も比重の大きい状態(4℃)での水1リットルの重さという具合に各種の単位が自然界にあるものを基準として体系化され、また桁上げには10進法を使った。フランスはこのメートル法を世界的なものとしようと1851年にロンドンで開催された第一回万国博覧会に展示したことから、その良さが理解されるようになり各国に広まって行ったという。

わが国では、1921年に「メートル法度量衡法」が成立したが、その裏には日露戦争時の苦い経験も影響したという。すなわち、わが国の帝国陸軍はメートル法を、海軍はヤード・ポンド法を採用しており、それぞれの発注する武器、弾薬は、それぞれの採用している規格で作られていたため、一方の規格で作られた弾薬は他方の規格で作られた武器では使えないといった事態があったというのである。その後、変遷を経て1966年にメートル法が完全実施され、これを厳格に守らせるため、尺貫法を使った大工職人などが逮捕される事態が起きたことから、当時、作詞家やラジオのパーソナリティとして人気があった永六輔が「尺貫法復権運動」を起こした。彼はラジオで「鯨尺を使ったから逮捕しにおいて」などと揶揄を続け、世論が盛り上がったため、1977年以降「尺相当目盛り付き長さ計」として、「1/33m」あるいは「1/26.4m」と表示した計測器(物差し)を「メートル法の範囲内」とみなして合法的に販売できるようになった。前者は大工仕事に使われる通常の尺、後者は和裁で使われる鯨尺である。

英米はいまだにヤード・ポンド法、原油の単位はバレル等、度量衡は、従来の慣行を捨て去るのはなかなか困難なものようである。しかし、わが国のワインの量目は世界標準の750mlとしてくれないだろうか…。

(久)